

## 書評

杉下知子著 「介護職を理解する  
よりよい共働をめざして」

(看護協会出版会)

鈴木 和子 (東海大学健康科学部)

本書は、看護職が介護職の役割を正しく理解する目的で書かれたという。しかし、読み終わっての感想は、隣接した専門職であり、実践の場で共働する機会の多い介護職の役割を知るだけでなく、看護職自身の役割も明確にできたということである。また、本書は、介護保険制度など保健医療福祉制度に関する最新の情報を正確に、しかも分かりやすく説明していて、実践者だけではなく、教育関係者にも有益であり、利用価値が非常に高い。

本書の内容を簡単に紹介すると、まず、介護をめぐる最近のわが国の状況とそれに伴う保健医療福祉サービスの組み立ての変化、つまり著者が強調する「サービスの統合」ということが起きていることが述べられている。次に、介護職の仕事について歴史的な視点から述べられ、それを看護職との接点という形で説明が加えられている。そこで、介護職と看護職の両者による「共働」ということがどういう形で実現し、それがサービス利用者に

とって、どういう意味をもたらすのかについて具体的に事例を通して述べられている。これは著者が日本家族看護学会の設立当時から理事長として活躍してきた経験から、対象としての患者・家族にとってのサービスの意味がしつかり捉えられていることを示している。

さらに、今後、訪問看護ステーションの所長としての看護職が介護職との共働のもとに、プライマリヘルスケアの中心的役割の担い手になる可能性について、著者が提言しているが、これは両職種の役割を方向づけるものであり、多くの実践者が勇気づけられるであろう。また、最後に在宅だけではなく、施設内での共働の実態について業務分担という形で具体的に示され、さらに今、重要視されている倫理規定についても言及されている。このように、本書は、確実な事実を基盤にしながら、世紀を越える時期にふさわしく、未来への提言や家族看護にも多くの示唆を含む良書である。